



南朝のさとかから

奈良県吉野町

「後醍醐天皇御尊影」金峯山寺所蔵

1343年北畠親房は常陸国を撤退し吉野へ、1348年には楠木正成の子正行が四条畷の戦い（大阪府）で高師直に敗北。吉野を奪われた後村上天皇は賀名生（奈良県五條市）に移りました。翌年、室町幕府内では内部抗争が発生、執事高師直を排除しようとした尊氏の弟直義が失脚し、尊氏の子義詮が政務を担います。直義は京都を脱出して1350年に挙兵（観応の擾乱）、南朝方となり尊氏と師直軍を破ります。その後師直は殺害され、尊氏の実子で直義の養子である直冬が九州探題に就任します。

その後は和議を結んでいた尊氏と弟直義が対立したため、尊氏は南朝を味方にするために一時講和（正平の一統）し、直義を降伏させます。（直義はその後死亡）

1352年、南朝方はこの機に京都を制圧、上野（群馬県）から新田義興・義宗が、信濃（長野県）から尊氏に代わって征夷大將軍に任命された宗良親王が挙兵して尊氏と交戦、鎌倉を一時占拠します（正平の一統の終了）。尊氏が鎌倉を奪還した後は足利義詮が京都を奪回、尊氏と義詮は北朝を再擁立します。同時期、足利直冬が九州から駆逐されます。

観応の擾乱

勝足利直義（南朝） × 負高師直・足利尊氏
後に師直は殺害、和議を結んだ尊氏と直義は再度対立。正平の一統と終了

南朝と尊氏は講和。南朝から直義討伐を命じられる。勝足利尊氏 × 負足利直義（後に死亡）
宗良親王・新田義興・義宗 × 尊氏 一統の終了
義詮は北朝を再擁立。後に鎌倉と京都は奪還される。



全国南朝の歴史資産等所在市町村活性化協議会
会長（福岡県八女市長） 三田村 統之
会報誌の刊行にあたりまして、会長としてひとことご挨拶申し上げます。

会報誌の刊行にあたって

本協議会は、奈良県吉野町の呼びかけのもと、全国の南朝、宮方と呼ばれた勢力の拠点になった市町村によって、平成30年に設立されました。構成市町村は東は茨城県筑西市から、西は熊本県菊池市にまで広範囲に及んでおりまして、室町時代に南朝という共通の歴史資産を持つ広域の市町村が、現代に再び連携して地域資源の再発見と地域の活性化を行うという点に大きな特色があると考えております。

南北朝時代は、朝廷が南と北に分かれるという日本の歴史上特異な時代で、皇族も武士も南朝北朝に分かれ、あるいは途中で敵味方が入れ替わりながら東北から九州までを巻き込んだ全国的な騒乱が起きました。最終的には南朝が吸収される形で南北朝の合一が図られるのですが、その後も後南朝と呼ばれる南朝再興運動が続いています。

歴史資産や伝統行事を末永く守っていくには、子どもたちへの歴史の伝承、地域の誇りの継承が不可欠です。本協議会の活動をきっかけに、構成市町村の歴史遺産が見直され、市町村同士の交流、何より未来を担う子ども同士の交流が育まれることを期待しまして、ごあいさつと致します。

約束は反故になりました。南朝皇族は次々と出家を余儀なくされ、経済的にも困るようになります。1428年に後亀山の孫、小倉宮と挙兵した北畠満雅が戦死してからは、伊勢の拠点と唯一の組織的な武力を失ってしまいました。

幕府の強硬姿勢が続く中、旧南朝勢力は奥吉野に結集するようになります。1443年、後南朝勢力が3種の神器のうち神璽と宝剣を奪う禁闕（きんけつ）の変（神璽はその後行方不明になる）が発生、1457年には南朝皇族の兄弟が吉野で蜂起、赤松氏の元家臣が兄弟を殺害し、失われた神璽を奪い返す長祿の変が発生します。以降も南朝の皇族が関係する再興運動は散発しました。

執筆 八女市役所文化振興課文化振興係
参考文献 「南朝研究の最前線」 呉座勇一 編 朝日文庫 「南朝の動乱主要会戦全録」 渡邊大門 編 星海社新書

今後の予定

創刊号は南朝全体の歴史を取り扱いました。今後はホームページや会報誌の作成、協議会ならではの広域連携した事業を進めていく予定です。



吉野山



協議会HP

<https://nanyoukyougikai.com/>

本協議会について

南北朝時代に、宮方あるいは南朝と呼ばれた勢力の拠点となった市町村が、歴史資産の保存と活性化を目指して協議会を結成しています。現在、関東から九州まで9市町村が加盟しています。これまで日本遺産の認定申請、東京奈良まほろば館での計4回に及ぶ連続講演会、奈良県吉野町や福岡県八女市での総会など広域連携した活動を行ってきました。令和4年度は協議会のホームページの作成や会報誌の発行を行っています。

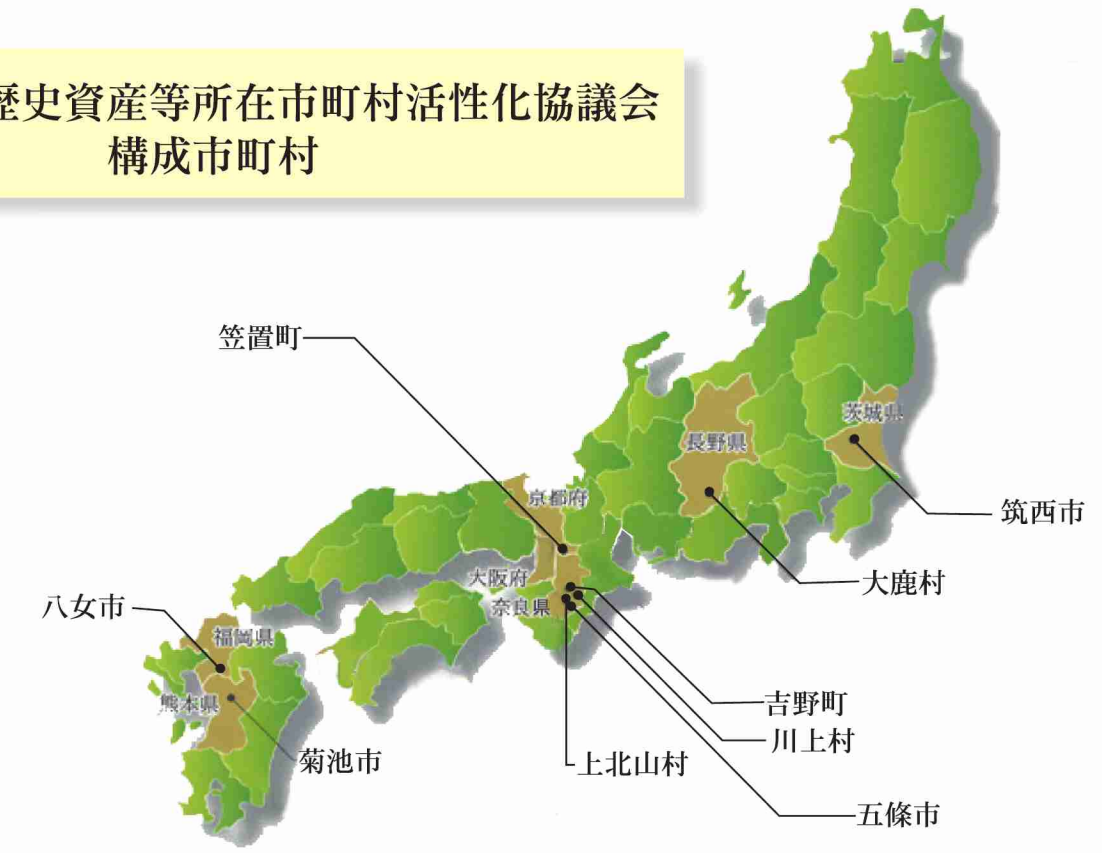
会報誌について

南朝の歴史や各市町村の活動状況をPRするため、会報誌を定期的に発行します。創刊号となる初回は南朝全体の歴史をテーマにしますが、今後は全国各地の地域や人物に焦点をあてた内容になる予定です。

南朝とは 南北朝戦乱の時代

後醍醐天皇が1336年に現在の奈良県の吉野に樹立した朝廷のことです。同時期、京都には室町幕府が擁立した北朝があり、両天皇とそれぞれの後継者、公家や武士は、南朝方と北朝方に分かれて各地で争いました。1392年の南北朝合一により、南朝を解消する形で朝廷は1つに戻ったものの、南北両統で皇位を継承していくという約束事が守られなかったため、その後も後南朝勢力による再興運動がたびたび起きています。

全国南朝の歴史資産等所在市町村活性化協議会
構成市町村



〔南朝とは〕 鎌倉時代から室町時代半ばまで
鎌倉幕府の成立から承久の乱まで

1185年～1221年
1185年に平氏を滅亡させた源頼朝は、領地の取り締まりや米の徴収を行う守護・地頭の設置を行い、1192年に朝廷から征夷大將軍に任命されるなど、鎌倉に武家政権をつくります。ただ、幕府の影響が及ぶのは東北や関東などの東国が中心で、朝廷は依然として大きな力を持っていました。

承久の乱から蒙古襲来、後醍醐天皇の即位まで

1221年～1318年
1221年、後鳥羽上皇は鎌倉幕府の中心人物であった北条義時の討伐を計画しますが、鎌倉幕府の反撃により敗北して隠岐に流罪となります（承久の乱）。この後、京都には幕府の出先機関で、京都や近畿地方など西国の支配や裁判を行う六波羅探題が設置され、朝廷よりも幕府の立場が強くなります。

1232年に幕府は法律である御成敗式目を定めますが、対象は將軍の部下である御家人が対象であり、畿内や西国にある公家や寺社が支配する荘園には影響が及ばないものであったため、朝廷でも裁判を行っていました。

1274年と1281年の2度のモンゴル帝国の襲来（元寇）に対応するため、鎌倉幕府は公家や寺社が管理している荘園の住人にも動員を命じるようになり、幕府の立場は更に強まります。博多には九州における出先機関である鎮西探題が設置されました。

後鳥羽上皇の孫にあたる後嵯峨天皇の子、後深草天皇と龜山天皇の時代からは、院、天皇、皇太子の人事にも幕府の考えが反映されるようになります。その後は、後深草天皇の子孫（持明院統）と龜山天皇の子孫（大覚寺統）から幕府の意見を聞いて天皇が選出されることになり、南北朝の騒乱が始まる要因になります。

承久の乱
勝北条義時 × 負後鳥羽上皇

東国武士が結集し、後鳥羽上皇が敗北。武士の立場が強くなり、鎌倉幕府の影響力が全国に及ぶ。

両統迭立
誰が天皇になるか、人事に鎌倉幕府が介入する。
持明院統 後深草天皇 光厳天皇（北朝）
大覚寺統 龜山天皇 後醍醐天皇（南朝）

鎌倉幕府の滅亡、建武の新政と南北朝分裂まで

1318年～1336年
天皇による政治を目指した後醍醐天皇は、元弘の変（1331年）により鎌倉幕府の討伐を計画します。事前に計画は発覚しましたが、後醍醐天皇は三種の神器を持って笠置山（京都府笠置町）へ逃れ、討幕を呼びかけたため、鎌倉幕府は持明院統の光厳天皇を擁立しました。河内国赤坂（大阪府千早赤阪村）では楠木正成も挙兵したため、鎌倉幕府は足利尊氏を含む大軍を派遣。笠置山と河内赤坂城は陥落し、後醍醐天皇は隠岐に配流されます。

1332年、後醍醐天皇の子護良親王（大塔宮）が吉野（奈良県吉野町）で挙兵。楠木正成らも呼応したため、幕府は再び足利尊氏らを派遣します。

この途中、後醍醐天皇の綸旨（命令書）を受けた尊氏は寝返りを決意、京都の六波羅探題を滅ぼします。関東では上野（群馬県）で新田義貞が挙兵、東国武士も協力し1333年鎌倉幕府は滅亡しました。

鎌倉幕府の滅亡
畿内 勝護良親王・楠木正成 × 負鎌倉幕府軍
尊氏寝返りで六波羅探題滅亡
関東 勝新田義貞と東国武士 × 負鎌倉幕府軍

1333年、後醍醐天皇は、直接綸旨（命令書）を出す天皇中心の政治を目指した建武の新政を開始、公家と武家が共同して運営にあたりましたが、新制度に対して公家と武家双方、新政で力を失った勢力から不満があります。

鎌倉には鎌倉將軍府が置かれ、後醍醐天皇の子成良親王と尊氏の弟直義が、東北には陸奥將軍府が置かれ、義良親王（後の後村上天皇）と北畠顕家、出家していた父親で、後世に大きな影響を与えた「神皇正統記」の著者としても知られる親房が運営にあたりました。

1335年、北条時行が挙兵、足利直義を破り鎌倉に入ります（中先代の乱）。弟を案じた尊氏は、後醍醐天皇に許可を得ずに出陣して時行を破ります。尊氏はその後も許可なく恩賞を与え、鎌倉に留まり続けたため、後醍醐天皇は新田義貞を討伐に差し向けたため、寺に籠って戦を避けていた尊氏でしたが、弟直義を助けるために再度出兵、義貞は退けたものの、奥州から北畠顕家が合流した後は挟み撃ちされる形になり、敗れて九州に一時逃れます。

途中、光厳上皇から新田義貞を討伐する命令を受けた尊氏は九州で勢力を立て直し、摂津湊川（兵庫

県）で新田義貞と楠木正成（戦死）を破って京都を制したため、比叡山（滋賀県）に逃れていた後醍醐天皇は降伏し、三種の神器を足利方に引き渡します。尊氏は光厳上皇の弟の光明天皇を擁立（北朝）し、建武式目を定めて室町幕府を開始しました。後醍醐天皇はその後京都を脱出、引き渡した神器は偽物だったとして北朝を認めず吉野に朝廷を開いたため、朝廷は南北に分裂します。

中先代の乱と尊氏の離反
鎌倉 勝足利尊氏・直義 × 負北条時行
尊氏は弟直義を助けるため後醍醐天皇の命令もなく出陣。鎮圧後も直義の助言で鎌倉に留まる。

後醍醐天皇による尊氏討伐
勝 北畠顕家・新田義貞 × 負足利尊氏
楠木正成
勝 足利尊氏 × 負新田義貞・楠木正成（戦死）尊氏京へ

南北朝の分裂
（南朝）後醍醐天皇 × （北朝）光明天皇・室町幕府

戦乱の全国拡大から南北朝合一まで

1336年～1392年
1336年、後醍醐天皇は北陸に子の恒良、尊良親王と新田義貞を派遣しますが、1338年に石津（大阪府堺市）で北畠顕家、越前（福井県）で新田義貞が相次いで戦死したため、やむを得ず作戦の見直しを行います。

北畠親房は、常陸国（茨城県）で南朝勢力の結集を図る一方、後醍醐天皇は子の宗良親王を遠江（静

岡県）へ、懐良親王を征西大將軍として五条頼元と共に伊予忽那島（現愛媛県松山市）を経由して九州へ派遣しました。尊氏は光明天皇から征夷大將軍に命じられる一方、翌1339年後醍醐天皇が志半ばで死去したため、南朝では後村上天皇が即位します。

後醍醐天皇 尊良親王 北陸へ
護良親王 中先代の乱死去子に興良親王
宗良親王 静岡へ のち長野へ
恒良親王 建武新政時の皇太子 福井へ
成良親王 鎌倉へ のち京都へ
義良親王 後村上天皇 子に良成親王
懐良親王 九州へ 征西大將軍
※皇子が多いため、一部を抜粋

